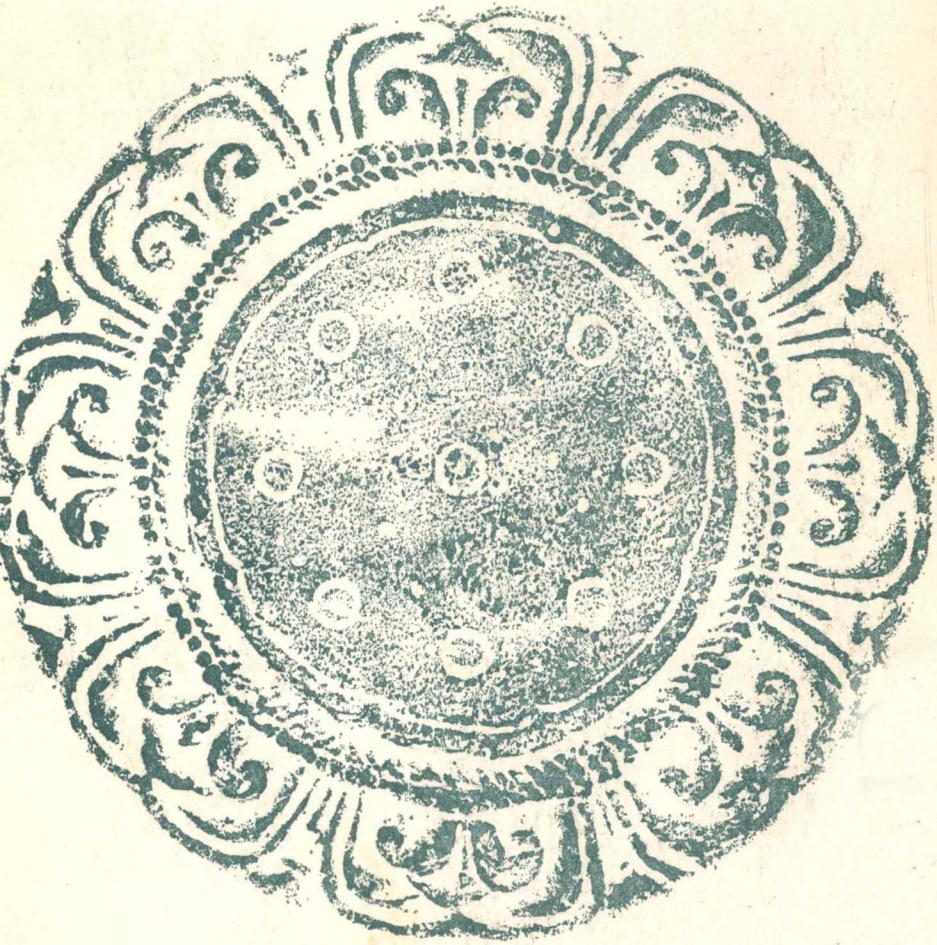
鑑真の泪



鑑真の泪

著者略歴　富山県東砺波郡雄神村金剛寺
（現在庄川町）生れ　本名　英治
富山県立工芸学校金属工芸科を経て、
早稲田大学英文学部卒業　毎日新聞
記者をはじめ60歳まで新聞、出版界
で過す

鑑　真　の　泪

昭和55年10月11日発行

著者　斎　藤　行　人

発行所　東　日　出　版　社
東京都文京区小日向2—27—8
電　話　03（947）5391

印刷所　関東図書株式会社
浦和市別所3—1—10
電　話　0488（62）2901（代）

定価 900 円（送料共）

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

若き芸術家の群像……5
鑑真の泪……103
沈鐘記……137
城趾公園にて（あとがきにかえて）……195

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

若き芸術家の群像

若き芸術家の群像

一

熔解炉が間断なく高い響きをたてていた。鋳型を焼く松の木の薪が燃える樹脂の臭いに熔銅の強烈な臭いが混り合う。真紅に焼けた鉄の炉蓋の穴から盛んに赤や紫や白光の炎が吹き上げる。何という美しい光彩、太陽が燃える火焔の色だ。軟かい黒土で作った冷やっこい冷土がこねられ、土間に溝が掘られる。コークスが幾度となく炉に投げこまれ、千二百度の熔解炉を中心に鋳造工場の中は、沸騰した熱を移動させ湧きたたせる。

やがて鋳型が焼き上がる。煉瓦を積み上げて作った囲いが取り壊され、真赤に焼けた鋳型が鉄の柄の長い鋏で取り出される。すかさず冷土が塗られ、幾つもの鋳型が二列の溝に並べられる。能町助手が湯加減を見て「いいでしょう」と合図する。いよいよ湯つぎであ

る。横越技手が熔解炉から湯（熔銅）を吸み出して取瓶に入れる。取瓶の取手に長い鉄の棒を通し能町助手と二人で持ち上げる。

「よいしょ、行こうぜ」

威勢のよい横越技手の懸声で天野と繁二郎は油の入ったブリキ罐を持ち、鋳型の鋳込口に筆の先きで油をすばやく塗る。能町と横越が持ち上げた取瓶が傾き、湯口から橙色に燃えた熔銅が流れ落ち湯口で一瞬パッと炎を上げると鋳型に注ぎ込まれて行く。雲濤先生は注意深くガス抜きを検べる。二十数個の鋳型につぎつぎと湯つぎを終わって能町助手と横越技手はホッと太い息を吐いた。

鋼鉄のように張りつめていた鋭どい神経がゆるんではじめて口が開かれる。能町助手が流れる汗を拭きながら「こんどはオシャカはないでしょう」と雲濤先生に話しかける。

「じょ、じょうだんじゃないよ。いまごろオシャカが出たんじゃ助からんよ」

雲濤先生はあわてて一瞬真剣な眼付きになった。

暫くして湯込みが終わった鋳型に冷水が振りかけられる。少しずつ冷水の量を増やしてかける。じゅうじゅうと白煙が湧きあがる。やがて冷水がざあっと浴びせられるように注がれると白煙は消えて、鋳型は黒々とした塊となって静まる。

「割ってごらん」

雲濤先生が生徒たちに声をかけると、待ち構えていたように天野や繁二郎をはじめ下級生たちも金槌を振り上げる。ガサッと音がして鋳型が割れる。アッと籠った嘆声がもれる。見よ、金色の青銅に紫色が虹のように走ったかと見ると、たちまち黒ずんだブロンズの像が姿を現わしたではないか。天野の仁王像も喜多俊輔の吉祥天女も繁二郎の聖観音像も——それにつづいて下級生の作品である花器や時計台や鳥なども——

雲濤先生は微笑しながら教え子を見守っていた。それが一番楽しい時であるかのように——繁二郎は俊輔と顔を見合わせた。俊輔の怜悧な眼はいつになく暖かであった。繁二郎は深い感動を味わっていた。三カ月もかかって原型を作った聖観音像が青銅になった。もちろん雲濤先生の手が加えられたが、とにかく自分の作った御仏がこの世に姿を顕わしたことは、どんな工芸品を作った時よりも大きな喜びであった。

「林君、煙草はないか」

横越技手が汚れた手を作業衣でこすりながらいった。繁二郎は雲濤先生をちらっと見てポケットからゴールデンバットを出して手渡した。横越は箱から一本つまみ出すと、火をつけてうまそうに大きく吸い込みながら、残りを返してくれた。繁二郎はすばやくポケッ

トにしまう。雲濤先生は横を向いて見ない振りをしている。もちろん喫煙は校則で禁止してあった。しかしそんな規則が守られるわけはないことを教師も知っている。ただ、あまり公然とやってもらっては困る。喫煙などは人間が成長して行く過程で、悪に対するある種の抵抗力をつける作用があることを先輩として判っているのである。もし石頭の厳格な教師がいてびしびし校則違反者を検挙するとすれば、映画鑑賞の好きな繁二郎などはとっくに非行少年のレッテルを張られている。映画館の出入りも禁じられ、教師が交替で毎夜映画館に監視に来ていたが、姿を見られても一度も声をかけられたことはなかった。模範生とまではいかずとも善良な生徒として通っているのは一に教師たち人間の度量が大きいからにほかならない。

二学期がはじまり、九月も半ばになると生徒たち、特に五年生の眼の色が変ってくる。年に一度の尚美会展覧会が一カ月後に迫ったからである。人が変ったように真剣な態度で登校して来るのは工芸美術部の生徒に限ったことではない。応用化学部の生徒も、機械・電気科の生徒も同じことであった。

応用化学部では展覧会開催中、いろんな化学的実験を行なって見せるほかに、婦人用の尚美クリームや化粧水、男子用ポマードなどを製作販売し、楽焼き窯を設け、観覧者が自

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ら書いた文字や文様のある菓子皿や湯呑みをその場で焼き上げて頒布するための準備をしなければならない。尚美クリームや化粧水は香料をフランスの本場から最高級品を直接取り寄せ、利益は度外視しているので市販のものより格安で品質が特別上等であると、毎年展覧会を待ちかねている市の婦人たちが多いのである。

機械・電気科では機械鋳物製造から、各種の工作機械を使って見せるほか、県内にただ一機しかない飛行機のプロペラを始動させるために壊れかけた機体を組みたてたり、古いエンジンの調整に余念がない。第一次大戦に出動したという飛行機で、もちろん現在では飛べないのであるが、子どもたちに人気があるので、プロペラをまわすのに生命がけで練習をするわけだ。

繁二郎は斬新なデザインのインクスタンドを製作していた。インク壺は五重塔からヒントを得たもので最上層部の屋根が蓋になる。もちろん形態は塔とはわからないくらい簡略化している。バックに透し模様の飾りを衝立のように立てる。模様は忍冬唐草とぶどう唐草を組み合わせたものであった。仕上げはいぶし銀にする予定なので、銀鍍金をするため銅の表面を鏡のように滑らかに仕上げるのが大変である。彼は一学期に製作した聖観音像と二点の出品であった。天野秀夫は洋風の壁面に取りつける照明器をつくっていた。幾何

学模様のデザインになるもので、硝子の軽快さと鋳銅の重厚さをいかに調和させるかに苦心した新しい作品であった。彫像は雄渾な仁王像である。

喜多俊輔は吉祥天女の金銅仏と、銀線象嵌の水盤を出品する。水盤は後に商工省工芸展覧会に出品して二等賞を受けたもので、デザイン、技術ともすぐれたもので高岡銅器の特長を最高に生かしたものであった。彼は自分の作品は比較的早く仕上がりそうなので、気楽に他の工芸実習室を覗いて歩いていた。そして、何科の誰は大作を作っているが創造性がないからつまらないとか、何部の誰は小さくて目立たない作品に取り組んでいるが、その真摯な態度は立派だ、などと繁二郎に報告してくれる。天才的な彼は自ら優等生になることを拒否して学校を良く休むことは開校以来の記録保持者だし、よく教師間で問題になる悪戯をするが、積極的で探究心が旺盛だった。学校を休んだ日は、終日市立図書館で読書に耽っていることが多かった。

「××よ、何故そんなに苦しむのだ」

喜多俊輔はよくそんなジョークを飛ばしながら真剣に製作に励んでいる美術工芸部の実習室をまわる。ダ・ヴィンチが「レオナルドよ、何故そんなに苦しむのか」と自分に向かっていった言葉を何かの本で読み、彼自身相当強い印象を受けたからであったらしい。だ

から「太田君よ、何故そんなに苦しむんだ。すばらしいじゃないか」とか「石橋君よ、何故そんなに苦しむんだ。こんなによく描けているじゃないか」といったふうに使うので、その秋から冬にかけて「××よ、何故そんなに苦しむんだ。どうってことはないすよ」といった言葉が彼等のクラス内で流行したのだった。それがしまいには「どうなったっていいじゃないの」という意味の「なったァーます」といった半ば自嘲的な言葉に変わったのは、すでに満州事変が起きていて、暗い時代が迫っているのを、敏感に先取りした若い芸術家たちの予感だったかもしれない。

「喜多君はまたみんなを激励して歩いているのか。まめな奴だな」

雲濤先生はとぼけた顔で繁二郎にそんな風に話しかける。実習の授業中でも忽然といなくなる俊輔の行動を「困った奴だ」とあきれた風に慨嘆してみせるが、内心は可愛いくて仕方がないのである。喜多俊輔も雲濤先生もともに地元高岡で名門の鋳物業者の家に生まれたのである。

「尚美展前の一カ月は貴重な時期だね。この期間で一年間分の技術の進歩が身につくのだから」

雲濤先生は能町助手に話しかける。能町助手は「そうですね」とあいづちを打ちながら

生徒の作品の仕上げに手を加えているが、毎年日展に入選している彼は「今年こそは特選を」と思って野心満々なのである。それに較べると毎年入選しているわけではない雲濤先生は、今年は出品しないつもりなので気楽である。雲濤先生は工芸部長という立場上、子弟の教育と学校の雑務があって製作に専心できないというハンデがあるが、どうも作家というより教育者に向いているのかもしれない。

しかし、雲濤先生より先輩である彫刻の松村秀太郎先生などは三十年も母校で教師をしているが、院展の院友になっている。そして教え子に強い影響を与え、たくさんのすぐれた作家を輩出させている以外にも、各界に有能な人材を送り出しているから、本当は松村先生の方が真の教育者かもしれなかった。ただし、彼は世俗に超然として、英国紳士のように山高帽にステッキをついて飄々と登校して来るので西洋コジキという綽名がついていた。そして校務については、まるでやろうとしないから、雲濤先生のような善人はいつの間にか雑務をやらざるを得ない破目になるのである。

午後三時になれば終業となるので生徒は帰ってよいのであるが、展覧会前の作品製作中は誰一人帰ろうとしない。別段、生徒間で作品の出来栄えを競うという気はいささかもないし優秀作に賞を与えるというわけではないが、人間は誰しも自分の全力を尽したいとい

う本性があり、それが青年期に移る時期に最も強く発揮されるものらしい。五時、六時まで残っているのは早い方で、汽車通学をしている連中は終列車に間に合うように九時過ぎまで頑張る。徹夜組も四、五名いることがある。学校の裏口から杉木立の崖を降りて行くと田圃が開けている。そのころは畦には必ず大豆が植えられていたから、それを根こそぎ失敬して来る。枝から青豆だけをむしり取って薬鑵で煮たてて夜食にするのである。これは明治時代からやって来たことらしいが、農家から苦情が一度も来たことはない。万事のんびりした時代だったともいえるし、工芸学校の生徒の徹夜のがんばりに同情的だったとも受けとれる。百号前後の日本画に取り組んでいる連中はどうしても、四、五日徹夜しないと展覧会には間に合わない。教師はさすがにそこまでは付き合えないので「火の用心をしろよ」と注意して六時過ぎ帰って行く。

繁二郎はときたま暗くなった校内を歩いてみる。コッコッと鑿の音が彫刻室から聞こえて来る。ああ、村上丙や楠恭や山本広明などが残っているな、と思って裸電球がいくつもぶらさがっている室内に入って行くと、彼等は凄い形相で木の塊と格闘している。塑造の原型をつくり、それを見て木に彫刻するのが修業の方法である。これは何も生徒に限ったことではなくて一人前の作家だってやっていることだ。石膏の原型を見つめる眼の色が違

っているが、彼らはもちろんそれに気がついてはいない。十代の青少年には大人のように三毒の欲望がないから、すーっと極く自然に神技の境地に没入出来るのであろうか。しかし、このことは何十年も後になって当時を振り返ってみて判ることで当の少年達はまるで意識していない。だから、それは悟りをひらいた高僧の無の境地と相通じている。

繁二郎は彼等の製作態度を見ていると、うかつに冗談もいえない。「ここがいいね」とか「まだ大変だな」とか月並みな言葉を二言、三言交わして早々に引き揚げる。

絵画部では河合順や田中栄一、石橋敬吾、島朝春が百号ぐらいの大作に取り組んでいた。太田欣也や小島鉄次は自宅で描いているということだった。田中は恋人の青さんをモデルにして鏡台に向っている女人像を描いていた。青さんとは冬の間、青色のマントを着て女学校へ通っていた少女で、高商や中学の生徒の間で、誰いうとなく青さんと呼ばれていた色白のふっくらした乙女だった。田中は土牛風の強い線で描いていた。島は二曲半双の屏風に花鳥を描いていた。大先輩郷倉千靱ばりで華麗な色彩の絵だ。石橋は富山市大法寺の山門を描いていた。古色蒼然とした色彩、重厚な偉容を岩絵具を塗り重ねて描き込んでいる。

絵でも彫刻でも大作になると個性がはっきり現われて来るから面白いと、繁二郎は感にたえた顔でしばらく黙って眺めていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com